都市部地域高齢者のインフォーマルな社会的ネットワークの維持に関連する要因
－友人とのつながりに着目して－

○　和洋女子大学　　岡本　秀明（3826）

〔キーワード〕社会的ネットワーク、高齢者、友人とのつながり

１．研 究 目 的

誰もが安心して末永く暮らしていける地域づくりのためには、単身者の急増、社会的孤立や孤立死といった問題に対応し、地域における社会的ネットワークを重視した取り組みが求められる。本研究では、都市部地域の高齢者のインフォーマルな社会的ネットワークとして友人に着目し、そのつながりの維持に関連する要因を明らかにすることを目的とした。具体的には、縦断調査データを用いて、第 1 に、友人と会う機会を維持している高齢者の特性、第 2 に、友人・仲間をもち続けている高齢者の特性を検討した。

２．研究の視点および方法

地域福祉で大切な「つながり」にあたる概念として、社会的ネットワークがあげられる。地域における非親族のインフォーマルなつながり（社会的ネットワーク）のなかで友人に着目し、そのつながりの維持に焦点をあてた。

都市部高齢者の縦断調査データを用いて分析した。初回調査は、住民基本台帳から無作為抽出した千葉県都市部 4 市の 65～79 歳の者 2,000 人を対象に、2010 年に自記式調査票を郵送した。有効回答数（率）は 1,067 人（53.4%）であった。追跡調査は、初回調査の有効回答のうち代理回答ではなく、基本項目に回答があるなどの条件を満たした 997 人を対象に、2013 年に自記式調査票を郵送した。有効回答数（率）は 717 人（71.9%）であった。分析対象者は、この 717 人から代理回答を除外し、基本項目に回答があり、かつ初回・追跡調査ともに IADL（手段的日常生活動作）が自立している者 610 人とした。

友人と会う機会を維持している者の特性を検討する分析では、初回調査時に友人と会う機会がある者のみを抽出し、この者のうち、追跡調査時に友人と会う機会が「ある者」と「ない者」の二値を有する変数を従属変数とし、二項ロジスティック回帰分析を行った。

友人・仲間をもち続けている者の特性を検討する分析では、初回調査時に友人・仲間がいる者のみを抽出し、この者のうち、追跡調査時に友人・仲間が「いる者」と「いない者」の二値を有する変数を従属変数とし、二項ロジスティック回帰分析を行った。

これら双方の分析の独立変数は、初回調査時の、年齢、性別（男性＝1、女性＝0）、家族形態（独居を基準とする 2 つのダミー変数）、経済的暮らし向き（ふつう・ゆとりあり＝1、苦しい＝0）、人間関係を広げる志向性（1～4 点）、居住地域への愛着（1～5 点）、趣味などの仲間内の活動（あり＝1、なし＝0）、町内会・自治会活動（あり＝1、なし＝0）、老人クラブ活動（あり＝1、なし＝0）、学習的な会への参加（あり＝1、なし＝0）、外出や活動参

加に誘われる（あり＝1、なし＝0)、とした。

３．倫理的配慮

回答データは統計的処理し個人を特定しない、調査は無記名で行い、回答は強制ではないなどを協力依頼文書に明記した。調査票の返送をもって調査協力への同意とみなした。

４．研 究 結 果

分析対象者（初回調査時）は、平均年齢 70.7 歳、男性 50.8%、女性 49.2%であった。友人と会う機会の有無に関して、初回調査時において、ある者は 568 人、ない者は 34 人であった。この 568 人のうち、追跡調査時にある者は 543 人、ない者は 25 人であった。友人・仲間の有無に関して、初回調査時において、いる者は 560 人、いない者は 39 人であった。この 560 人のうち、追跡調査時にいる者は 528 人、いない者は 32 人であった。

二項ロジスティック回帰分析の結果、友人と会う機会を維持している者の特性は、人間関係を広げる志向性が強いこと（$p<.05$)、趣味などの仲間内の活動に参加していること（$p<.05$)、老人クラブ活動をしていること（$p<.05$）であった。なお、外出や活動参加に誘われることがあることに、有意傾向（$p<.1$）がみられた。

友人・仲間をもち続けている者の特性は、人間関係を広げる志向性が強いこと（$p<.05$)、趣味などの仲間内の活動に参加していること（$p<.05$)、学習的な会に参加していること（$p<.05$）であった。なお、男性よりも女性のほうが友人・仲間をもち続けている傾向（有意傾向：$p<.1$）がみられた。

５．考 察

友人と会う機会を維持していること、友人・仲間をもち続けていることの双方の分析結果に共通していた要因は、人間関係を広げる志向性が強いこと、趣味などの仲間内の活動に参加していることの 2 つであった。人間関係を広げる志向性が弱い者は、友人と会う機会がなくなってしまったり、友人・仲間がいなくなってしまう可能性が高まる。このような者が、もし知人や近所とのつながりが希薄であれば、家族・親族以外のインフォーマルな社会的ネットワークがほとんどなくなってしまうという気にかかる存在となることが考えられる。趣味などの仲間内の活動をしていることは、友人とのつながりの維持に効果的であることが示された。このような活動がより活発になるように、地域において、場の提供や新たな活動がうまれやすい仕掛けをしていくことが望まれる。老人クラブ活動、学習的な会への参加は、友人とのつながりの維持に一定の効果があることが示された。地域において、多種多様な形態の学習・社会参加活動が行われ、地域の高齢者がいずれかの活動に気軽にかかわれるような取り組みが求められる。

［本研究は科学研究費補助金（22730444）の助成を受けて行った。］